【翻　訳】

沢山のアプローチがあるが，成果は少ない

―― マートンとコロンビア学派の理論構築モデル ――

ステフェン・ターナー　著

久　慈　利　武　訳

【梗概】中範囲の理論に関するロバート･マートンのエッセーと機能的説明，構造的アプローチに関する彼のエッセーは社会学史で最も影響力を持つものに属する。しかしそれらの輸入は謎である。彼は明確に最も極端な科学的公式主義者やその貢献者の幾人かにみずからを結びつけ，コロンビア学派の理論構築モデルを支持している。しかしマートンは彼の議論に対するネーゲルの批判に答えず，ラザースフェルドとハーバート・サイモンのライバル関係を認めないし，哲学的文献，方法論の文献をめったに引用せず，批判者に曖昧な情報で応答し，そのことがマートンの遺産に深い曖昧さを残している。

> 概念は多くあっても証明された理論は少なく，見解は多くあっても，定理は少なく，アプローチは多くあっても，成果は少ない。力点を変えてみることが万事よくするのだろう。
>
> Robert K. Merton（quoted in Zetterberg［1954］1963：v）

序論

ロバート・マートンは，説明の性質，理論の性質，理論の経験的な証明の妥当性，今後の理論的発展の展望に関係する基本的な疑問を扱った社会学の一般的方法論に関する沢山の論文を執筆した。これらの論文はマートンにとって，デュルケムにとっての『方法的基準』，ウェーバーにとっての『学問論集』の所収論文に当たる。古典としてのマートンの地位は，部分的には「上記の古典と同様，彼が首尾一貫した独自の社会学的認識のビジョンを持っていたかどうか」にかかっている。フェルデナンド・テンニエス，アレックス・ド・トクヴィルは，そのようなビジョンを持たなかった，いや，古典的テストでそれを結晶化させなかったのでその栄誉に浴さない。カール・マンハイムはパースペクティブ問題についての彼の解決案は致命的欠陥を帯びていて，結局ウェーバーによって元々仕上げられた立場に堕してい

るので，やはりその栄誉に浴さない。マンハイムについての最も破壊的な方法論批判はマートン自身によって書かれた（1968e：543-62）。『構造』の序章と同じテキストのデュルケム，ウェーバー論に示されている彼の方法論のビジョンは今では中身を何も生じていないように思われるので，パーソンズは尖端にいる。約束された土地は一度到達してみると，約束されたものとはあまりにも似つかわしくないので系統的な社会理論の約束自体が不信を買う。対照的に，マートンはその著作が社会学が実際に達成し得たものとうまく合致していたので，ベターな予言者であったように思われた。彼は本稿のエピグラフが示しているように，結果を手に入れる問題にはきわめて慎重であった。社会学がアプローチ，パースペクティブを超えて成果, 経験的事実に進む必要があるという考えは彼の方法論のビジョンの核心にあった。社会学がそのような知識を産出した限りで，マートンのビジョンは立証された。しかしそのビジョンを理解することは我々がこれから見るように容易い事柄ではない。

マートンの論文，特に中範囲の理論に関する論文（1968d：39-72）は，社会学者を古典としてランクづける幾分ばかばかしいゲームと別に，社会学史においても興味をそそる。マートンが曖昧ながら密接な関係を持った「コロンビア学派の理論構築モデル」は，アメリカ社会学において理論が経験的リサーチとどのように関係したかの問いに，いっとき最も影響力を持った解答であった。20世紀半ばの多くの社会学者はそのモデルを支持し，自分のスカラーシップを中範囲理論を展開することによって社会学に貢献することと見なした。一種のコンベンショナル・ウィズダムとしてマートンのエセーは，コロンビア大学の体験を持ったものでなくとも，数十年の間，社会学でなされてきたものの形式と内容であった。中範囲の理論というタームは依然として社会学者，一層応用社会科学者によって呼称されている。そしてこの概念は現在でも通用すると述べる堅い支持者を持っている（e.g. Pawson 2000）。Barney Glaser のような方法論思想家，理論家は彼らのコロンビア体験から自分の見解を生み出し，コロンビアモデルは多くのコロンビア大学院生にスカラーシップのテンプレートを提供している（Price 2003）。

しかしながら，方法論史のドキュメントと解すると，マートンの論文はやや神秘性を持っている。それらは方法論の歴史家が通常行っている類の歴史分析に抵抗している。その中には，受容史を眺めたり，源泉や教師を同定したり，所与の領域での思想の大きな発展のなかに作品を位置づけるような思想史の標準的なアプローチ，次のような方法論に特にレリバントなアプローチも含まれる[1]。デュルケム，ウェーバーに関する際限のないとまではいわないが広範な文献が物語るように，デュルケム，ウェーバーの方法論的著作に関して上記の分析

[1] その作品が言及している特に今日的な科学的内容，著者の密接な科学的同志，その思想家の特に哲学のリーデングと個人的なコンテキストを眺める。

はきわめて成功裡に行われている。

以下で，私は方法論史における標準的分析方法の適用と通常の問いを尋ねることが上記のエセーのケースで何を生じているかを明らかにする。何かを時としてきわめて興味を惹くものを生み出している。しかしそれらは方法論的著作の探求によって特徴的に生み出される類の明晰さ，究極的には哲学的著作の一形態である方法論的著作のコンベンションがかれらの著者からの力を持つということを生み出さない。代わりに，通常の問いを尋ねることはテキスト，その主張，意味をもっと謎にした。この領域のマートンの著作を納得のいく解読をすることの難しさはよく知られている。科学に関する著作のなかでのマートンの「機能」のタームの用法を理解しようとし，そのタームが帰結以外の何かを意味しているかどうかを確定しようと試みた後で，エルスターは降参した。

> 私は何度も読み，読み直した後で依然知らないことを告白せざるを得ない。たぶんマートンは自分の首を実際に突き出したり，それを明確に抱きしめることなしに，強い主張を述べるという最も旧式のゲームを演じているのだろう（Elster 1990 : 135）。

我々はこれから知るようにテキスト中にこれと同じ問題に出会うだろう。しかし曖昧さはあるパタンをとっており，彼の方法論的著作のコアの曖昧さを同定できる。

知的コンテキストから見たマートン：概念スキームの発想

方法論的著作に通常尋ねられる一種の問いは「いやしくもそのテキストがなぜ執筆されたのか」「それは誰に敵対して書かれたのか」というコンテキスト的なものである。通常の回答は，そのテキストは，（通常は議論のパートナーを挙げた上で）進行中のある議論に適用する試みである，というものである。偉大なテキストは議論の用語を変え，テキストの偉大さは，そのテキストが書かれたコンテキストの用語と慣例にそれらを対比することによって，理解されうる。コンテキスト主義は歴史へのアプローチとして盛んである。というのは，あとからふりかえって偉大なものと見なされたテキストのコンテキストは忘れ去られてしまっているので，その観点からかそれに対抗してテキストが執筆された慣例が忘れ去られているので，少しも新奇でない思想家に新奇性が帰せられるのである（Jones 1977 ; Skinner 1969, 1970, 1972, 1974）。

マートンの場合，我々はこのコンテキスト問題に特に直截な回答を持つように思われる。ターゲットはパーソンズである。テキストはあからさまに論争的なものではないが，ターゲットは明らかに概念スキームの構築と理解された分析的社会学理論のアイデアである。パーソ

ンズにぶつけられる事例はポウル・ラザースフェルドと一緒の経験的リサーチの体験であり，大半は応用社会調査研究所（BASR）系譜の事例を使用している。しかし，BASR系譜の調査成果を有用で理論に関係すること――パーソンズ自身それを否定していない――をプロモートする以外に，この事例は何を主張するのか。

「経験的リサーチの社会理論に対する意義（1948）」は経験的リサーチが我々の社会学的理解を変更し，我々の理論的考えをトップダウンのパーソンズのそれや仮説検証モデル以外のものに見直すことを支持する，やり方の一類型を提示する。マートンが述べるには，リサーチはさらなる機能を持っている。掘り出しパタンは問題が定式化される仕方がどこか間違っていることを物語る異例な結果の登場を伴う。リサーチはまた再定式化される。その語によってマートンは概念スキームの精密化の圧力がかかっていることを意味している。リサーチはまた偏向させられる。その語によってマートンは新たな方法の使用を通じて新しい種類のデータを生み出すことによって理論的関心を方向付けし直すことを意味する。リサーチは明確化する。その語によって，理論家にリサーチ可能なプロジェクトに転換されうる仕方で自ら説明することを強いることを意味する（Merton［1948］1968a：157-58）。

テキストはマートンの典型的な知的戦略を物語っている。彼は主題について標準的な見解を採用していて，それを拒絶していないが，標準的見解に反するか種類が異なって見える諸要素――経験的リサーチのさらなる4つの機能――を導入することによって付帯条件を付けている。しかしその付加は標準的見解を過激化するものでもなければ，置き換わるものでもないし，拒絶するものでもない。マートンはのちにこの戦略のいくつかの事例を曖昧と呼称している。一つの簡単な例は，我々がエキスパートの医療の忠告に依存するという事実である。このコア事実の皮肉な付帯条件は，我々がその忠告に憤ることがあるという二次的な事実である。Donald Levine（2006）は「マートンは自律的な理論の考えにアンビバレントであった」と述べている。この戦略，あるいは実際のアンビバレンスは，彼の方法論の著述を特に謎めいたものにしている。標準的見解を改訂するよりもむしろ，付帯条件に照らしてそれを是正したり，付帯条件をカバーするようにそれを拡張するために，彼は標準的見解と付帯条件の双方を手つかずに残している。

この戦略が生み出す混乱はパーソンズによって用いられているターム「概念スキーム」[2]との関連で眺めることができる。本稿では，「新しいデータは概念スキームの精密化の圧力をかける（［1948］1968a：162）」というアイデアとの関連で登場する。その根拠は単純である。それは一組の事例に基づいている。「新鮮な経験的事実はマリノフスキーを魔術の理論に新

[2] マートン自身そのタームを使用していて，拒絶していないが付帯条件を付けている。

しい要素を編入するように導いた（[1948] 1968a : 162)」。ケイト・スミスの戦争債券キャンペーンについての BASR による研究は，「人々はセールスマンシップ，偽りの愛想尽くし等を好かないのに，なぜケイトを好いたのか」を明らかにした。インタビューは，人々がケイトがまじめであると信じたことを明らかにした。自己犠牲的で自己の声を抑制した彼女の行為が彼女の真剣さと任務への献身を証明したから。各々のケースで，リサーチは限定的理論に編入されるべき新しい変数を示唆した（[1948] 1968a : 165)。これは表向きは無害であるように見えた。概念スキームの意味するものについて何の議論もなかった。その上オープニングの文章に見るような論文の動機づけの声明「仮説演繹的モデルはリサーチの現実味を歪める傾向がある（[1948] 1968a : 157)」とはこの中心的問題に偶発的なものである。しかしその論文はこれについてはほとんど語っていない。彼自身の追加はこのモデルが誇張したり極小化するものを単に是正するだけである（[1948] 1968a : 157)。

上記の文章を理解することは上記のテキストを理解する困難さの例証である。マートンが十分に知っていたように，概念スキームというタームはマートンが学生であった時期の科学についてのハーバードの議論（特に L. J. Henderson と Alfred North Whitehead による議論）ではごく当たり前のものであった。それはマートン自身が教わったハーバードの影響力のあった総長 James Bryant Conant の論文（1947〜1957）でも広汎に使用され続けた。クーンはコナンの子分（被保護者）であり，概念スキームに置き換わったパラダイムの語以外は，クーンの『科学革命の構造』に見いだされるものすべてをコナンのテキストが含んでいる。概念スキームの語は元々はヘンダーソンによって用いられ，ホワイトヘッド によって精密化されたように，この語はある時期の科学理論によって想定された仮定や概念を指したが，単なる理論よりもはるかにゆっくりしたペースで変化し，経験的データとはるか遠いものになった。例えば，ヘンダーソンは医学の概念スキームを数世紀にわたって保持されるものと見なした。概念スキームの改訂は革命的なことであり，革命はまれなことである。マートンが Alexander Koyre, Pierre Duhem という科学史家の通読から非常に熟知していたように，この概念のルーツは新カント派のものであった。

概念スキームとデータの関係は二通りのやり方で眺められる。コナンは連続線上の観点からこれを見ている。経験的一般化と仮説から理論と概念スキームが上昇するにつれて，経験的な中身が次第に減退する。しかしもっとラデカルな解釈は，データ自体が上記の非経験的な仮定によって構成され，かくしてそれらを直接に浸食できないというものである。これはクーンがコナンをラデカル化し，ラデカルな概念変更を有名にするために，究極的に用いたオプションであった。しかしマートンが提示しているデュエムのパラフレーズにも存在する。「科学において獲得された用具や実験結果は実質的種類の限定的仮定と理論を通じても射止

められる（1945：463n2）。」

パーソンズは1930年代にヘンダーソンから別な教訓を引いている。「科学であるには，その学問が概念スキームを持つことが要求される。それを欠くと，理論や経験的一般化は大きな全体に集合することはできず，進歩もかなわない」。彼はその過去の思想家のなかに社会学の概念スキームを同定し，他の概念スキーム（特に経済学のそれ）との関連でその位置を理解するという孤高の任務を自らに課した。当時のコンテキストでは，これは理解できる。新カント派の科学モデル「科学を事実のドメインを論理的に統合する階統的に誂えられた概念スキームと見なした」によって直接影響を受けたドイツの社会学者たちはそのようなスキームを際限なく作り出した。ゲオルク・ジンメル，レオポルド・フォン・ウィーゼ，アルフレッド・フィアカントはそうした。パーソンズは，それが究極的にどんなに過度に楽観的であることが判明しても，その分野の歴史の分析から引き出されうるユニボーカルな（単一義な）共通スキームはスキームのこの簇生への分かりやすい反応であると考えた。

上記のすべてに対するマートンの反応はどうだったか。彼は，社会学見解市場のなかに教義体系を調達したり，その敵陣との公開の学術戦争に従事する，当時の競い合う社会学理論学派は十分に値する終結となってきているというパーソンズの見解（Parsons 1948：164）に強く同意している。そこで，単一の概念スキームの必要に関して彼がパーソンズに同意しているように見えるだろう。しかし彼は続けて「力点のシフトが万事を丸く収めるだろう」と述べている。力点のシフトとは，スキームにだけ集中することから離れて，「スペシャル理論を相互に矛盾しない命題の（より一般的な）集合に総合する関心の流布が存在する（Parsons 1948：166）」を前提としてスペシャル理論に向かうことを指す。マートンはこれを，多くのアプローチを少数の成果で置き換え，多くの見解を少数の定理で置き換えることを容易にする社会学理論を実践する人物の希少資源配分の方針（Parsons 1948：166）と呼称する。これは彼がのちに結実させる中範囲理論のコアである。しかしそれは概念スキームの問題とどう関連するのか。

その答えは「経験的リサーチの社会学理論に対する意義」のなかに見いだされる。我々が見てきたように，概念スキームの用語はマリノフスキーの呪術論についてのマートンの議論（［1948］1968a：162）に，一般的志向の用語はスミス女史の戦争債券キャンペーンの議論（［1948］1968a：163）に登場するが，彼の用いる用語は既存の用法とごく緩やかにしか関係しない。マリノフスキーの呪術論もBASRによる戦争債券キャンペーン研究を動機づけた大衆説得という曖昧なアイデアもハーバードの伝統が念頭に置いていた概念スキームではない。その上，概念スキームの変更を強制する際のデータの持つ特別な役割は大して特別のものには思えない。マートンが再考察しているように，マリノフスキーは，トロブリアンド島

民が彼らの漁法が信頼できる沼池のなかでは呪術を使わず，漁法が当てにならない状況でのみ使用していたことに気づいていた。マートンはまたこの手がかりを呪術と偶然で制御不能なものの関係に関する理論に一般化した（［1948］1968a：163）。先に構築された概念スキームが予測できなかった何かが存在することを暗示する限りで，その議論は曖昧な仕方であるが，概念スキームを構築するプロジェクトに対する疑念を立証している。しかし少しでも厳密に述べるなら，上記の事例はコアの意味での，またパーソンズの意味での概念スキームと関係がない。

用語の中途半端な用法の多くの事例が存在する。公式化（formalization）と導出（derivation）の用語は，のちに見るようにその本来の意味を喪失している。これはマートンの見解を同定することを難しくする。概念スキームについてのハーバードの考えについての彼の見解はどんなものか。彼はそれを拒絶しているのか。我々がスペシャル理論を構築するとき概念スキームの役割は消滅するとマートンが考えているなら，デュエムからの引用にも拘わらず，マートンは拒絶していると人は考えるだろう。しかし，各々の科学は開発された概念スキームを必要としているというパーソンズの考えを拒絶しているのか。その議論は社会学を科学としてどうやって前進させるかという方針の主張に過ぎないのではないか。もしそうなら，その方針はどれだけ正確にワークすると信じられているのか。スペシャル理論に集中することは複数のアプローチの問題から解放される成果と定理を産み出すというのは本当なのか。この議論は彼が 1975 年に放棄した議論であるから，以下にとって重要である。同様に，社会調査の標準的仮説検証モデルは調査で実際に起こっていることを誤って表示するという彼の議論は，このモデルとの方法上の不一致を指すのか，それとも単なる実際的な注釈なのか。abduction[3] に対する彼の言及との関連で見るように，彼は別なモデルを持っているのか。もっと一般的には，マートンは社会学の発展のロードマップを提示するために上記の論文を使用しているのか，社会学にとってどんな種類の認識が可能かというモデルを描いているのか。つまり受け取られている見解の代わりに別な方法観がインストールされるというのか。

アブダクション（abduction）と編纂（codification）

コンテキスト主義者は定式化ないし理論で目新しいものは何かと尋ね，パーソンズが裏書きしたものと方針レベルよりも方法論のレベルで異なるものをマートンが裏書きしているな

[3] ［訳注］語源は後述のように，チャールズ・パースであるが，定訳はなくアブダクションと音読みでそのまま表現することが一般的だそうである（本学言語文化学科　伊藤春樹氏の教示による）。マートンの訳書では，中嶋竜太郎氏はマートンの次の記述から意訳して「外転」という訳語を与えている（96 頁下段）。「既成理論に矛盾するか，確証されている事実に矛盾するか，いずれかの理由で変則的観察物が研究者の好奇心をかき立て，より広い知識の枠組みに組み入れさせ，実りある研究方向（新しい理論を生み出したり，既存の理論が拡充されること）にぶつかることがある」。

らば，パーソンズ批判を理解することははるかに容易であろう。ここで我々は何らかの結果を手に入れているように思われる。仮説検証，仮説生成の標準的見解に加えて，コロンビア学派のアプローチと関連した理論的実践群。マートンがそれを独自の方法として扱うことを意図すると否とに関わらず，彼はそれに関して codification（編纂）という用語を充てている。そのうえ，編纂という活動はコロンビアモデルならびにコロンビアモデルに影響を受けた人々の思考に大きな役割を果たしている。ラザースフェルドと協力者の実践では，transfer という用語はあるコンテキストで開発された説明を新たなセッテングに広げたり応用する仕方を系統的に探求する実践を描くために用いられている[4]。

diversity（分岐）のコンテキストと justification（承認）のコンテキストの区別のなかで信奉されている標準的見解は，説明仮説を発明する方法は一切存在しないが，そうすることは科学的発見の本質であるというものである。狭い射程の経験的結果からもっと一般理論的主張に一般化するという考えは，仮説検証の標準的モデルの外に位置する。ここに方法が存在するなら，標準的な教科書方法論への真に独自の追加であろう。そのアイデアをラザースフェルドにクレジットを与えるマートンは，編纂が入手できる経験的一般化を明らかに異なる行動領域で系統化しようとする（1949：155）と述べるとき，それを transfer（転移）のアイデアと結びつけている。マートンは，それが Charles S. Pierce の概念であるアブダクションの要素を含むことを示唆するとき，珍しくそのアイデアの哲学的源泉を同定している。マートンはアブダクションを，新しい事例を単に収集するよりもむしろ推論の一ステップとして，仮説の創出と保持と理解している。そしてパースはずっと以前から，意外な事実の戦略的役割に気づいていた（［1948］1968a：158n5）と指摘している。

アブダクションはわかりにくい発想である。今日ではアブダクションは観察を説明する新しいルール創出を含んでいるというパース自身の考えに従って，最良の説明における推論の一形態と見なされている。しかし，マートンが意図していることはパースの用法ほど明白ではない。我々がコロンビアの理論構築の立会人で参加者の一人 Hans Zetterberg によって与えられるもっと明確な説明を考察するときに，曖昧さが一層明確になる[5]。マートン同様，

---

[4] transfer という用語は Lazarsfeld/Sewell/Wilensky 1967 の *Use of Sociology* に関する Ernst Nagel のメモのなかで a term of art として登場した。これが独自なものと見なされた理由は，William F. Ogburn によって代表される系譜にある相関社会学が分割され順序づけられるのが適切な相関関係をそれのみで説明的なものとして扱い，さらなる理論的裏付けが必要と考えず，その結果の他のコンテキストへの適用が本来の分析に価値ないし説明力を与えると考えず，（もっと一般的には）理論的解釈を non-objective として扱ったからである。Ogburn は scattergram（スキャターグラム）の解釈を an editorial cartoon（社説の風刺画）の解釈に例えたことで知られている。これはそれ以降の文献で重要な区別である。ある限定されたセッテングを超えた一般化がセッテング内で因果推論を行うのにふさわしくないという考えの今日の用語に関しては，Glymour 1983.

[5] ［訳注］ゼッターバーグは abduction を「少数の高い情報価値の命題に，多数の低い情報価値の命題を包摂する」と述べている。

ゼッターバーグは理論的説明よりもむしろ一例を与えている。彼は「スクールの価値ある代表に選出されたベニングトン・カレッジの大学生は他の者よりもカレッジ・コミュニティのリベラルな価値に同意している」という事実から出発する。それを少し乱暴にいうと，一連のステップを通じてその知見をより高次の抽象水準に高めるなら，「ある集団で平の成員が好意的評価を受け取るほど，彼らの考えは他の集団成員のそれと収斂してくる（Zetterberg 1954：24）」。この事例は，パースともっとうまく合致し，アブダクション（abduction）が演繹（deduction），帰納（induction）と違って新奇の概念要素を追加するという発想をつかんでいる。しかし新しい概念スキームの追加と別に，ゼッターバーグが描いているすべては，さほど広くない一般化をより広い一般化に包摂するおなじみのパタン，つまり演繹的説明そのものである。新しいもっと一般的な概念要素の追加は，理論の仕事である。しかしこれをする手続きは一切存在せず，理論家の創造的活動を要求する。たがマートンは掘り出しパタン（serendipity pattern）のようなものを論じる際に，標準的姿に何かを付加したと考えているように思われる。質問はそれは何か。これは科学の標準的テキストと対照的に，社会調査で実際に起こっていることに関する社会学的種類の単なる観察か。それとも，社会学的知識の性質についての我々の理解を変えるものか。

この問いへのひとつの回答は，観察上の知見の説明がより高次の抽象水準に同様に上昇させることが周知の Glaser の grounded theory（データ対話型理論）のコアであることに気づくことから得られるだろう。それは「概念はデータから発生する」という混乱したアイデアを追加している[6]。

もしデータが当然の与件（the naturally given）であって，社会調査が入り込むすでに概念化された社会的世界であるならば，さもなければ判読しかねるこのフレーズも判読できるだろう。この解釈は，社会データに基づいて統計的仮説ないし民族誌的仮説を構築し検証しようと努めている調査者の経験を描いている，マートンの事例にうまく合致する。調査者はし

---

[6] これが由来するパースからの引用文はこの見解を曖昧な仕方で述べている。

わたしがアブダクションを始めて一つの推論として分類するずっと以前に，アブダクションもちょうどそれに当たる説明仮説を採用するという操作は一定の条件に従うことが論理学者によって認識されていた。つまり，事実ないし事実の一部を説明するだろうと仮定されないなら，仮説は仮説としてすら承認されることはできない。推論の形式は次の通りである。

C というビックリする事実が観察された。

しかし A が真実なら，C は当然の事柄であろう。

したがって，A が真実かどうか疑う理由がある。

かくして，「A が真実なら，C は当然の事柄であろう」という前提のなかにその内容のすべてがすでに存在するまでは，A は abductively には推論され得ない（Pierce［1934］1960b：117）。

この指摘は，A の内容は C から手に入れることはできないが，C を含む C 以上の何かを必要であるというものである。これは，概念がデータから生まれることができるという考えとは正反対である。その代わり，新しい概念はそれらを説明する事実に持ち込まれねばならない。

ばしば仮説が働かない場面に出くわし，新しい仮説を発明したり理論をネガティブな結果に合致するように修正するだけでなく，そのために社会的世界に戻ることによって仮説が働かない理由を見いだす。争点をフレーム化するこのやり方は，仮説検証モデルのようにデータは我々のために構成されているのではなく，時折ビックリする仕方で口答えすることを示唆する。もし我々が我々の仮説を述べられているように検証するだけなら，我々は次の事実を見逃す。つまり，我々の調査の被験者が我々の本来の仮説に含まれない彼らの行動の理由を伝えるさらなるインタビューにかけられるという事実。マートンはそのようなケースを掘り出しパタンの見出しの下に描写している。彼はその街でこれまで入手できたよりも，新たな郊外のホームで，ベビーシッターの入手が容易だと誤信している親たちの事例を挙げている。その過ちは郊外の方がより多くの人々を親密な知り合いになり，それゆえ彼らのためにより多くのベビーシッター候補の若者がいるという事実に由来した（［1948］1968a：159）。

しかしこれはマートンの見解に混乱の拍車をかける。社会調査のこの口答え特徴の一つの理由は，次のものであろう。遡るべき理由付けし解釈するエージェントの真のアクセスできる間主観的世界が存在することを認めることは，社会学的説明におけるこの世界と上記の間主観的実在の存在論的，理論的プライマシーを認めることにつながる。この世界を質問紙調査者のインタビュー・スケジュール上の尺度化しうる回答を持った質問集合に方法論的に構築することは基底にある間主観的実在への賦課，必然的に歪曲，たいていは戯画化である。しかしマートンはそのような結論を下していないし，この種の問題があることを認めてすらいないように思われる。にもかかわらず，理論と経験的調査の関係の考察全体はそのような結論に向かっている。上記の争点は社会学の方法論では周知のことであり，その存在をマートンが全く知らなかった人口に膾炙した現象学者 Alfred Schutz の関心事であった[7]。それらは，「中世の世界観のようなものは，多様な世界観を持つ諸個人からなる中世の実在と本来的に問題を孕んだ関係を持つ理念型である」というウェーバーの「客観性論文」の主張に中心的なものである。

マートンは「彼ら（エスノメソドロジスト）が提起した問題は質問紙調査者には周知のものであり，彼らはその知識に基づいてそれらの問題を処理している」とみなす，ラザースフェルドによるエスノメソドロジストの質問紙調査批判の棄却に荷担している。しかし質問紙の作成のような実際的なことを所与とすれば，この応答は「我々の結果が基底にある実在近似物と誤表示であることを我々は知っているが，実は我々は基底にある実在に本当は気にかけない」と述べるものである。これは，有益な近似物を得ることができる応用調査者にとって

[7] 唯一の箇所は，マートンが「シュッツと Peter McHugh は，多元的発見に関する論文で Dorothy Swaine Thomas を共著者の一人に挙げ損ねている」ことを指摘しているものである（1973：447n19）。

はすばらしいことである。ケイト・スミスの戦争債券キャンペーン調査のように，質問紙が十分に深く掘り下げていないという事実を指摘したマートンのようなおよそ科学者にほど遠い者（much less scientist）にとって，最小限のことを述べることはふさわしくない。同様に，マートンは「この究極的な実在に執着すること自体が行き止まり（a dead end）であり，前進の途は必然的に近似物である理論を提案し洗練することを通じてである，と全く正当にも述べている。人は中範囲理論戦略への彼の引き続きのコミットメントをこの主張の事実上の是認と受け取ることが出来る。しかしそうすると，我々は別な曖昧さに直面する。上記の近似物の地位はどんなものか。近似物でない理論の捨て石なのか。そうとすればいかに。あるいは，それらが我々が社会学に期待できる最良のものなのか。あるいは，BASR 調査によって提示されたこの種の近似物が我々が望みうるすべてなのか。

古典学者の間で

もし我々が上記のテキストを（社会学史の実際の古典的人物の立場や議論と比較する）もう一つの標準的方法でアプローチするならば，謎は明らかになる。ここでもまた，マートンが何を読んでいたかは謎である。彼がそのアイデアを広汎に利用しているウェーバー，デュルケム，特にジンメルの著作についての彼の知識は例外であったことは明白である。その上，彼が用いたアイデアの先史についての彼の知識はビックリするほど広汎であった。意図されざる結果に関する彼の初期の論文（1936）はこの精通を示している。彼は決して果たされることはないだろうが，このアイデアの全史を書きたいという願望を表明している。このケースでさえ，これらのトピックに関する哲学的文献と古典学者間での哲学的議論の双方をビックリするくらい無視している。

にもかかわらず，彼が言っていないことが現れている。方法論的著作でウェーバーは見地の問題の卓越した理論家である。ウェーバーにとって，社会科学の内容そのものがまずその科学自体によってでなく，変化する文化によって構成されており，したがって社会科学の内容を変化させている。文化的見地へのコミットは社会科学の先行条件である。何ら自動的な科学的見地は一切存在せず，我々が社会科学に回答を要求する問いは文化に起源を有し，特別の社会科学がこれらの関心事の下位集合を省察する。要するに，ウェーバーにとって，「沢山のアプローチ」は社会科学の状態であり，社会科学は途方もなく若く，文化的に所与の予備的に設定された多様な出発点の範囲内でのみ結論に到達しうる。科学であるためには全領域を統合する独自に通用する概念の整序を必要とするという，新カント派の科学哲学の考えに執着するジンメルさえ，階級利害と他の政治的違いによって動機づけられた見地は，すでに総合の試みがかなえられない多様なアプローチを生み出したが故に，社会科学においては

これは不可能であることに気づいていた。

マートンは沢山のアプローチスローガンでもって，上記の関心事に反響しているように思われる。彼はマンハイムについての議論のなかで，ウェーバーに現出したような視点の問題を自覚していたことを示している。マートンはそこではマンハイムは後期になって，その主題のウェーバー的見地に後戻りしていると述べている（1968e：560n25）。マートンはその主題に関してウェーバーにもジンメルにも語りかけることはなかった。ジンメルの主要な方法論論文（[1917]1950）は引用されることはなかった。ウェーバーの方法論的著作は1930年代に科学に関する争点のコンテキストで直接引用されている。そこで我々はこれらの論文に関するマートンの省察を持たないばかりでなく，彼の反応の記録も一切持たない。ドイツの社会学大系の構築――ウイーゼ，フィアカント等によって提出された縮減できないほど多様な枠組み――は彼には回避される運命であるように見えた。彼はジンメルがしたように，なぜそれが起こったか尋ねたり，この問いへのウェーバーの入念な回答に語りかけることもしなかった。

方法論的問題に関する古典学者との対話は，要するにマートンのスタイルではなかった。おそらく社会学が新しいスタートを切ったという考えの1940年代の興奮とともに，「その創設者を忘れることを躊躇する科学は滅びる」というホワイトヘッドのスローガンがこれらの問題に適用されたのであろう。しかし，これらの問題に関する古典学者との対話の不在には例外があった。マートンはコロンビア学派一般と同様に，デュルケムの『自殺論（[1930]1951）』に魅了された。ジェームズ・コールマンは，マートンの社会学教育の高得点の一つとして大学院ゼミでのこのテキストについてのマートンによる詳細な尋問の強さと為になったことを思い起こしている（Coleman 1990：29）[8]。疑いもなく，マートンはデュルケム同様，アプローチの多様性の問題は確実な経験的結果に集中することによって解決されうると考えた。本稿のエピグラフとしてマートンの引用文のなかに，「アプローチ」と「成果」が併記されている。しかしここでもまた謎が存在する。デュルケムが自分のしていることを自分自身で考察している，彼の方法論的テキスト『社会学的方法の規準（1895）』がコロンビア学派の主要関心事となることが決してなかった。彼らがそれに代わると考えたものが何か決して明確ではない。

デュルケムの扱いはそれ自身の魅力的なサブプロット（脚本の脇筋）を提供する。テキストはコロンビア大学で長く吟味された。理論家によってだけでなく，学部のサーベイ統計家達によっても洗練された仕方で議論された。Rennis Likert，Samuel A. Stoufferとともに経歴

[8]［訳注］ターナーは原文ではMerton/Coleman/Rossi（eds.）の序文でColemanが語ったものと勘違いした。リプライ（2009：485）で訂正している。訳文ではその訂正に倣って直してある。

をスタートさせたが, 1950 年代のコロンビア大学の中心人物となった Herbert Hyman は,『自殺論』の分析を解釈する問題に彼の『サーベイ設計と分析（1955)』の 2 つの章を充てている。ハイマンはその書物の主要な特徴を理解した。「デュルケムは全く同じ種類の証拠で一見したところ根拠づけられているように見える「社会的」仮説群に好意を寄せて，自殺と十分に相関のある気候や緯度に関する仮説を排除していること」。もし我々が当時および現在の社会学に一般的な基準を用いれば，デュルケムは一貫していない（矛盾している）という結論を下すだろう。彼の仮説は彼が拒絶する仮説と同様確証されていない。ハイマンは問題を指摘し，その含意を回避しようとする。

> 学生はデュルケムによってフォローされた設計のなかに一つの奇妙な特徴に気づいたかも知れない。その唯一のねらいが社会的原因以外のすべての可能な説明の否認にある「間接的」テストのすべてを完了した後で，彼は社会的要因の影響の直接的テストに進んでいる。人はこの事実を思案する（Hyman 1955 : 230-31）。

「間接的」「直接的」という用語はハイマンにデュルケムを矛盾でなく一貫している，ただしほんの部分的にだが，可能にする。ハイマンは Cohen/Nagel（1934）の標準的教科書に述べられたミルとゼッターバーグの『社会学における理論と検証（1954)』を引いている[9]。その方法は質問紙調査では知られていないことを彼は認めている。彼が引くことができた唯一の例は，スコットランド移民の研究であった。スコットランド内部に効果の一貫した差異が一切存在しないことを明らかにすることによって，原因となりうる諸要因を排除して，残りの効果はスコットランドの農村生活に関係したグローバルな社会運動の結果であるという結論に導いた。デュルケムは我々に唯一の代替肢，社会的原因の彼のリストを強いる，非社会的原因を排除する間接的テストを使用した。

この説明は二つの理由でそれ自体が奇妙である。一つには，それは非対称であるから。ハイマンのロジックによれば，デュルケムが社会的原因から出発していたならば，彼は容易くそれを除外でき，他の説明の一つを直接の証拠に基づいて受け入れられる必要のある残る説明とすることができよう。その直接の証拠は，言明が統計的相関と見なされるなら，どの点から見てもデュルケムが好む主張の証拠と同じくらい好ましいものであるから。第二に，デュルケムは，社会的世界の複雑さが残余法の使用を不可能にし，共変法（concomitant variation）という別な方法を適切なものとすることを理由に，残余法ならびに間接的証明を

[9] 間接的テストのリファレンスはおそらく残余法を指すだろうが，彼は他の排除法，差異法ならびに一致と差異法の組み合わせを念頭に置いていたかも知れない。

伴う他のすべての方法を論難している。しかしそれが単なる統計的相関への適用と見なされるなら，この方法を彼が使用する気持ちが理解できない。彼の議論が次の通りの場合にのみ理解できる。つまり，自殺率に関して非社会的変数が不完全にしか相関しない（つまり因果的でない）。ある社会的変数が完全に相関する，つまり真の原因である。正しい回答は，デュルケムの基準は社会学に一般的な基準と違う。彼にとって，問題は次の点である。彼の考える相関は完全な法則である。不完全な場合にもほぼ完全に近い法則である。説明する度合いを一段階上げることは自殺率を一段階上げる。人は実際の例外に対するデュルケムの取り扱いに異議を唱えるものの，例外（少なくとも反証例）は一切存在しない。要するに，デュルケムにとっては，ハイマンにとってとは違って，これらが科学の実際の法則（real law, true generalization）なのである。

コロンビア学派社会学がかれらのアイコン的古典研究の寄せ集めを作った事実は，彼らの作業方法に特に現れている。デュルケムがミルと自分の違いを説明している『社会学的方法の規準（1895）』をハイマンは読むことを決して厭わなかったことに納得がいくだろう。しかし一連の同じく誤謬を含んだ解釈を刊行した（1958, 1965, 1975, 1985）コロンビア大学で博士号取得したHannan Selvinもまた上記の主要な文章を見落としているように思われる。マートンは自分から『社会学的方法の規準（1895）』に取り組んだことはないし，コロンビア大学学生に教えられている説明は間違っていることに気づいていた。しかし実際の方法論テキスト――ミルに言及しないでも，デュルケム，ウェーバー，ジンメル――へのこの無頓着は彼らがどのように進めたかの理解にとっては重要である。コロンビアの社会学は上記の古典的方法論問題に自家製の回答，正しい，今日的，現代社会学に関連した回答を行おうとし，旧来の困難な問題と格闘する必要を認めなかった。

ゼッターバーグ：コロンビア・モデルのスポークスマンか？

それでは自家製版とはどんなものか。それを歴史的に独特のものにしたのは何か。これらは明確な回答を手に入れるのは厄介なことが判明している。ハイマンがゼッターバーグに言及しているのは，方法史へのもう一つの標準的なアプローチを指している。「主要な人物の教え子と追随者によって与えられた方法の解明と適用を見よ」。そしてこのアプローチは翻って，方法史を理解するためのもう一つの標準的な方法を指している。「その方法論者によって使用されている公式構造を見よ」。公式構造の問題は不可解にみえるかもしれないが，依然としてそれは問題の核心である。マートンは「系統的な」社会学理論を要求した。「系統的」は一見して，理論の諸要素間に何らかの種類の論理的関係を含意するように思われる。我々はこの用法は標準的でなく，曖昧な用法に含まれることにすぐに気づくが，「公式化」とい

う用語すら使用している。パーソンズにとって，論理的関係とは網羅的分類の公式構造のそれであり，論理はタイプ分けの論理であり，構築は過渡的（暫定的）的と見なされた。パーソンズは社会学者が彼らの理論を微分方程式で述べる将来の希望を抱いていた。マートンは類型，概念スキーム構築アプローチを拒絶したが，彼の拒絶は何らかの種類の方法原理があるのかどうか不明な仕方で述べられている。これはマートンの方法論の著述ではよく起こることである。ここや別な箇所で，マートンは経験的調査の実情に訴え，彼が批判的方法的戦略を糾弾する傾向があるが，彼が気に入っている類の調査の大まかな点は何で，それがどこに導くかは触れない。これは彼の批判者，特に『社会学的想像力（1959）』でこの点を指摘し，60 年代世代の精神にそれを固着させた C. Wright Mills の急所である。

この時期のコロンビア社会学によって是認された類の調査の実際の状態は，ベレルソン / スタイナーによって産出された経験的知見の著名な目録によって最もうまく代表されるだろう。これは『人間行動：科学的知見の目録（1964）』として出版された。この書物は，多少堅固な行動科学の統計的知見の集合であった。それは多くの人々にとって，「行動科学」の名称の下に社会科学（the social discipline）を戦後方向付けし直す革新の約束の失敗を提示した。もちろんマートン自身はこの革新の提唱者の一人であり，新たに設立されたフォード財団に対する重要なレポート（1949）のなかでそれを擁護した。落胆した者と批判者の見地からは，その革新は無関係で理論的に無意味な研究の束にすぎなかった。そこに欠けていたのは，目録の中身の間の何らかの論理的ないし系統的なつながりであった。

中範囲の理論は戦後初期のこの状況への応答，そして少なくともある種の理論へのその将来の効用の観点から見たこのリサーチの価値の擁護であった。しかしそれを一つの応答と理解するには，それが約束する知見間の論理的関係ないし系統性はどんな種類のものかという問いに回答することを要求する。もし我々がその問題が論理的形式のものとみなすならば，コロンビアモデルは理論がとるべきはどんな形式かという問いに対する回答を持っていた。「x の値が大きくなるほど，y の値が大きくなる」という形式の言明。これはマートンがデュルケムを解説するためにある事例で用いた形式である。しかしそれは彼がこの形式を用いた唯一の場所である。彼の弟子はもっと頻繁にそれを用いた。例えば，Lewis Coser は『社会的闘争の機能（1956）』のなかで，ジンメルの翻訳の章から始めて，注釈し，それをコロンビア大学で用いられている用語で公式化するサマリーで締めくくっている。上記のサマリーの多くは，「x の値が大きくなるほど，y の値が大きくなる」の言明に似ている。

> 集団への参与が大きいほど，成員の人格包絡が大きいほど，激しい紛争行動に従事する機会を多く提供し，従って不忠に対するますます激しい反応をみせる（Coser

1956：72）。

この言明はコロンビア大学の隠語に伴う問題を例証している。この形の言明は経験的テストを引き出すには有用であるかもしれないが――タームの操作的定義を与え，データを集め，そのような関係があるかどうかを見るためにクロス表ないし相関表を作るだけでよい――，もしこれが理論的言明間に論理的関係が含まれていると想定するなら，系統化の目的には役立たない。

マートン―ラザースフェルドの用法と区別された公式化の標準的意味は次のものである。公式化された理論の論理的関係は，（言明の意味の何らかの特徴によってよりもむしろ）理論のなかの言明の形式の効能virtueによってのみ保持されるものである。コーザーの言明は，形式に基づいて，我々に他の言明――例えば首尾一貫性――についての推論を引き出すことを可能にする形式ではない。一部は「xの値が大きくなるほど，yの値が大きくなる」に似ているが，他――「紛争は集団の境界とアイデンティティを設定し維持する働きがある（Coser 1956：38）」は似ていない。これは単純なケースであるが，標準的な表示にどのようにして公式化されるか不明である。他の言明はもっと複雑である。

> 反目は通常は親密な関係の要素として含まれる。収斂の動機付けと離散の動機付けは実際の関係で混合しているので，関係はスイゲネリスという統一的性質を有しながら，動機付けは分類ないし分析のためにのみ区別されうる（Coser 1956：64）。

我々はそのような言明が互いにどのように関連するかリーズナブルな推論をする用語の巧妙さに何らかの複雑な直感の感情を持つ必要がある。

しかしそのような関心事に対する用意周到で，理にかなったマートン的反応が存在する。マートンは，科学的理論の論理的先行要件を提示する方法についての議論は沢山存在するが，それらはあまりに抽象水準が高いので，これらの格言を現行の社会学的調査に翻訳する見込みは望外のもののように思われる（1949：140），と述べている。しかしながら，上記の基準の近似物は全く不在なわけではない（1949：150）と述べ，正確さと論理的一貫性への圧力は非生産的な活動に導くことがあると警告しながら，そのような基準の正当性はその間違った使用によって無効にされることはないと結論している（1949：153）。彼はまた今日ないし19世紀の自然科学にふさわしい基準を社会科学に適用するのが間違っているのは，その基準が間違っているためでなく，今日の社会科学が近代初期の科学の発達段階と似た段階にあるからである，と述べている。

しかしマートンのこの形式の使用は潜在的混乱を警告する赤旗を揚げている。我々が見てきたように，「x の値が大きくなるほど，y の値が大きくなる」は，それを統計的関連を指すものと解読したハイマンよりも，それを確定的なものと見なしたデュルケムとは幾分異なったものを意味した。それはマートンに，あるいはコロンビア大学の社会学者達の間に，どんなものに受け取られたのか。時には x が y と相関することを意味し，時にはもっと強い何かを意味したのか。あるいはその言明が意味するものは何かの問いに一貫した回答が一切存在しないのか。人はマートンのなかにこの問いに対する回答を一切見いだせない。しかしマートン自身が Berger/Zeldich/Anderson のテキスト（1966）と並んで肯定的に引いているテキスト，ゼッターバーグの『社会学の理論と検証』のなかに回答が見いだされる（1968d：60-61）。ゼッターバーグのテキストは当時最も読まれ酷評されたテキストの一つであった。それは 1954 年の初版以来いくつか版を重ねた。それはコロンビア大学の社会学者達によって引用され，ゼッターバーグは彼のアメリカのキャリアのほぼすべての期間にわたって（1953～1964）[10] コロンビア大学に雇用された。このテキストとマートンの関係はマートンの見解とコロンビア学派の理論構築モデルとの関係同様はっきりしないが，このテキストを考察することは少なくとも問題点がどこにあるかを明らかにする。

ゼッターバーグの本は社会学への論理実証主義の適用ではない。彼は当時の哲学文献に一度だけ言及しているものの，哲学とは距離を置いている。それはむしろコロンビアモデルを自らの用語で要約しようとする試みである。ゼッターバーグは George Lundberg，F. Stuart Chapin によってインスパイヤされた社会学の厳格な方法を学習した者として自らのストーリーを語っているが，このタイプの大半の社会学的リサーチを意義の欠けているものとみなした。コロンビア大学では，彼は社会科学を前進させる仕方をめぐるラザースフェルドとマートンの議論のマートンサイドとして彼が特徴づけたものを発見した。要するに，その本は改宗者の著作である。この本は私が本稿のエピグラフとして使用した，マートンからの同じ引用文で始まっている。中範囲理論の地位と意味の問題はゼッターバーグの営みを定義している。中範囲理論は部分理論である。しかし，社会学的思考の地平はこれらの理論をもっと包括的な全体に統合する問題のように見える（1954：2）。すなわちこれはマートンが総合（consolidation）と呼んだ問題である。

我々は「x の値が大きくなるほど, y の値も大きくなる」という言明の意味の問いへのゼッ

[10] 1953～1954 年一般教育の講師として，1954～1957 年専門学部の助教授として，1957～1964 年准教授として雇用された。ゼッターバーグはオハイオ大学社会学部長在職 2 年間に，大半は若手，若干の終身社会学者のパージと排斥を開始したので，人物として広く酷評されている。

ターバーグの回答から始める。ゼッターバーグは社会学は確定論的に恒常的な説明をほとんど持っていないことを認めている。そこで彼は相関的ないし次第に度合いを増すカテゴリー分析を伴う結果を確率が増すことに関する言明に翻訳する。彼があたえる事例はStoufer の『アメリカの兵士（1949)』から引いたものである。軍の規律に関して低い同調者グループに分類される兵士は，同調に関して次に高いグループの兵士よりも昇進率が低く，後者は最も高い同調グループよりも昇進率が低かった（1954：37-38)。このケースでは，方法はデュルケムから直接のもので，関係は完全であるが3つのカテゴリーしか含まない。「昇進率は同調率とともに高くなる」という命題の厳密な検証ではなかった。命題が蓋然的なものとしてまじめに意図されたなら，昇進確率の事実は同調の測定事実（欠損値を含む）によって厳密に指し示され，両者を関連づける計量的法則が存在するだろう。そしてこの場合，何かがそれらから引き出されるように，それが他の理論命題と関連づけられるように公式化されるだろう。生憎なことに，個人の同調は個人の昇進確率の正確な指標ではなく，せいぜいのところ，同調テストで同じ点数をとった兵士群の成員が昇進する確率の指標である。すなわち確かに，相関である。対照的にデュルケムはこの結果を法則と呼ぶ根拠を持っていた。デュルケムは自殺率を考察したときに，集合体の属性を測定していると考えた。そこで，彼の規則性は真であり，真実であった。

ゼッターバーグのこの問題の解決はデュルケムとハイマンの間に位置した。彼は「xの値が大きくなるほど，yの値も大きくなる」という言明を確率の増加に関する言明として扱い，そのような言明は帰無仮説の通常の統計的テストによって弱く検証されうると理由づけた[11]。彼が提示している証拠は帰無仮説のカイ二乗検定の結果であるという事実にもかかわらず，これは彼に同調－昇進の結びつきをうまく検証された命題として扱うことを可能にした。彼はそれから一つの重要なステップを追加した。お互いに論理的に関連づけられる似たような命題群は，あるユニットのなかに命題を加えた結果全体として一層高く検証されると述べている。彼の理由付けは，演繹される命題はもとの命題と同じ確率を持つので，仮説のもつ含意が検証されるときにはいつでも，結果は実質的に統計的検定の再現である。10個の関係命題を検証することは最初の命題を10度検証することと同じ程度に善である（1954：75)。

[11]「xの値が大きくなるほど，yの値も大きくなる」のこの確率論的構成物の文字通りの意味は，確率のパタンが，その経験的一般化がそれに関してなされる集団のすべての下位集合に関して当てはまるだろうというものである。統計的テストは実際のデータがそれから抽出されるものである母集団というアイデアを伴い，確率の立言を宇宙に関する主張にし，サンプルがこの母集団からのものかどうかに関するテストである。なぜこれが大切か。説明は一般的主張の含意を伴うからである。しかし任意の職位ないしは実際の職位者群に関する限定的な何も母集団に関する主張によって直接に含意されない。そこでこれらの主張は厳密な意味で説明していないし，任意の実際のデータ集合は母集団に関する無限に大きな主張群と矛盾しない傾向がある。

> これは単一命題を検証することが比較的難しく，理論（複数の命題の体系）を検証することが比較的簡単である理由の説明である。我々は命題の任意のものにささやかな経験的支持をあたえることができるが，単独でとりあげられた任意のものに多大の信頼を寄せるにはこれでは通常は十分でない。しかし理論はこれらのささやかな支持を整理統合してその公準の高い支持に変えることができる（1954：76；1963：163；邦訳：178）。

この説明の問題点は，命題が（演繹的に関連づけられるのに必要な文字通りの意味で）実は真ではないという点である。同調の各々の増加が昇進の確率を産み出すという趣旨の命題の文字通りの真理のテストは，帰無仮説をカイ二乗に基づいて棄却するよりはるかに厳しいものである。もしその命題が真理であるなら，同調の増加にいかなる例外も許さない，同調と昇進の関係の普遍的な一般化であろう。従って，それらがカイ二乗から得る最もささやかな支持は最もささやかというよりむしろ無関係（不支持）である。x と y の関連に関する帰無仮説をテストし，x と y の関連に関する普遍的な形式の理論的言明は，「x が上昇するときに，y が上昇しない」という無差別の仮説と「x が上昇するときに，常に y が上昇するという両者以外の何らの関連が存在しない」という普遍的主張のあいだに逆接（disjunction）という論理的関係が存在する場合にのみ機能する，という結論を引き出す。しかしもちろんこれは正しくない。実は，この時代の行動科学を特徴づける，帰無仮説をテストし，それから理論的結論を引き出す手続きは，Kurt Danziger のいうような，「科学的方法の軌跡」（1990：154）を代表するものである。

しかし基礎論理学を無視する以外にこの問題からの脱出法が存在する。我々は上記の全く弱い種類の検証は大いに初歩的なものであり，非常に荒削りの材料からかつてはリファインされたかも知れない類の法則を単に述べているに過ぎない，と主張できる。この像は思わず引き込まれるそれである。それは社会学がベレルソン / スタイナータイプの非常にささやかな知見を理論的に統合することによって，前進することができ，かくしてそれらを構成する命題よりもうまく検証されている理論を生み出すことを述べている。我々は，その理論の欠点はその未熟さの所産であり，道を下ると，それらは未熟さが減じられたものに，文字通りの真理に近づき，次第に他の理論で固められると，いうこともできる。これはマートンの戦略であった。しかし彼が実際にこの戦略が機能すると信じていたかどうかは，疑問である。

マートンが実際に何を信じていたかを確定する問題の一部は，公式主義，公式化の全作業に彼の謎の関係を考察することによって眺めることができる。謎の関係というのは，公式化を構築する中範囲理論に関する彼のアイデアを応用した人物を褒め称える一方で，公式化に個人的に距離をおきつづけているように見えるからである。『社会理論と社会構造のポーラ

ンド版（1982）』の序文で，彼は哲学の訓練を受けた公式論理学者でその主要な著作がマルクス主義の功利的個人主義者版を提供しようとしたポーランドの社会学者 Andrzej Malewski を褒め称えている[12]。この賞賛はポーランド読者へのこびへつらいではなかった。1975 年の論文「社会学の構造分析」のなかで，当時亡くなって久しかったマレウスキーを再び引いている（1975：33）。しかし同じ論文で，彼は経済学と心理学を除く社会科学が「堅く編み込まれた理論体系」の理想を洗練したことを語っている（1975：42）[13]。

もう一つの証拠は我々が最後の審判問題と呼ぶものについてのマートンの注釈に由来する。系統的な理論の提唱者は最後の審判の日を遠い未来に追いやることができるが，システム化が何を意味するかを永遠に曖昧にすることはオプションではない。公理化の理想は通常のオプションであり，マートンにおいては顕著ではなくとも明らかに存在していた。公然と拒絶してはいない。マレウスキーを褒めたのは他ならないそのためであり，この方向でのブラウの努力を拒絶しなかった。ゼッターバーグ自身を含む理論構築のコロンビアモデルの豊富な追随者達を勘当したりはしなかった。その上，マートンのなかに系統的な社会理論の最後の審判として何らかの種類の公理的体系化の代替肢が存在していたなら，それは決して結晶化しなかった。

最後の審判問題への回答を要求せず，系統的な中範囲理論をもっと明るい未来への助走としてのそのような理論の価値とは別に，単なる経験的一般化に認知的価値を加えたものと理解する解釈も存在する。類似のアプローチは，公式化ないし演繹理論について忘却して，「x の価値が大きくなるほど，y の価値も大きくなる」という言明を上記の社会学者達が扱う事実の類と合致する仕方で扱う，つまりそれらをカテゴリーがある程度の予測力を持つ相関，統計的関連，表に関する単なる言明として扱う。上記の関連は変数間の他の関係についてのいかなるものをも強く正当化せず，相関が非常に高いケースを除いて，演繹を許さない。これは Costner/Leik の非常に影響力のあった論文「公理理論からの演繹」の見地である。そ

---

[12]〔訳注〕このように表現したのは，Der empirische Gehalt der Theorie des historischen Materialismus（1957）の論文執筆者であることが念頭にあるのだろう。1982 年と 1975 年の時期後先が逆になっている。

Andrzej Malewski の著作に *Verhalten und Interaktion. Die Theorie des Verhaltens und das sozialwissenschaftlichen Integration.*（Ubersetzung aus dem Polnischen von Wolfgang Wehrstedt）J.C.B. Mohr 1967 がある。

Hans Zetterberg の前掲書に Malewski の下記の英語論文が言及されている。

1965 “Levels of Generality in Sociological Theory” in Hans L. Zetterberg/ Gerda Lorentz（eds.）*A Symposium on Theory and Theory Construction in Sociology.*　Totowa, N.J.：The Bedminster Press.

1962 “Two Models of Sociology” *The Polish Sociological Bulletin.* 1：（H. Albert（H.g.）*Theorie und Realitat.* Mohr：Tubingen 1964, S.103-115.）

[13] Merton が Clark Hull をお手本として繰り返し言及しているのは，一層それを物語っている。哲学者 Kenneth Spence の影響下で，Hull は構造と機能の発想を伴う公準の体系を構想している。ところで我々がのちに知るように，マートン自身の哲学の対話者 Ernest Nagel と同様，Spence は Hull の公理化の試みをナンセンスとして退けている。

れは「A と C」の関係記号を保証するために「A と B」「B と C」の相関がどれだけ高いことが必要かを図で示した。

統計的関連の事実はほとんど演繹的意義を持たないが，それは何かを正当化する。概念的に互いに関連したそのような関係の集合は単一の表や単独で取り上げられた相関よりも認識上の重みをもつ。この意味でゼッターバーグは正しい。その上，「A と B」「B と C」の相関が存在することは，それらの相関が弱いものだとしても，「A と C」が相関する可能性を高める[14]。もし社会学の状況が弱い関連を扱う事柄である場合，諸部分の結びつきを正当化するために上記の弱い関連を使用する理論構築は，その関連がそれに帰属される因果的実在の類を持つことを証明する方法として，ベレルソン / スタイナー流の弱い関連を棚卸しするものよりベターである。たとえささやかなものであっても，関連した経験的主張が個別の主張に相関の証拠の弱い経験的な支持に加えて，お互いにあたえ合うある程度の支持が存在する。ゼッターバーグはなぜこの支持が必要かを理解していた。交絡は排除することが厄介な代替仮説が常に存在することを意味した。これはマートンの著作では表面化しないがラザースフェルドにとっては，実はコロンビア・プロジェクト全体にとって中心的な，重要な争点である。それは交絡の問題に代替的アプローチを提供する。当該の命題を弱く正当化する若干の弱く確証された命題を持つ理論の観点から理解されうる関連は，交絡因子のケースである潜在的な因果的作用の事実によってのみ支持されるものよりもベターに支持されている。我々がそれをマートンがたまたまの当事者にすぎず，ラザースフェルドが関与した主要な方法論論争のコンテキストに位置づける時にのみ，これのレリバンスが明白になる。

ラザースフェルドのサイモン問題

社会科学の偉大な方法的著作[15]は，これらの著者が社会科学の主要著作を産出するのと同時に執筆されたり，改訂された。これらのテキストに共通のアプローチは，方法的著作を例証するために，また反証をするために実質的著作を利用している点である。方法論に関するエッセーの期間中，マートンはもちろん経験的リサーチに強く関わりを持ったり，経験的リサーチに協力したり，自分からつながりを持った。彼の著述はコロンビア大学に就任し，ラザースフェルドと共同したのちの彼の体験を反映している。両者の関係は複雑である。マートンはしばしばラザースフェルドの授業を代行した。教えるという観点からは両者は多少と

---

[14] ［訳注］ゼッターバーグのこの命題導出に対して，「A と C」の相関は必ずしも引き出せない，とコストナー／ライク（1964），ブレーラック（1969）は指摘する。むしろ今ではこちらの方が定説だそうである（本学人間科学科　神林氏教示）。

[15] Mill［1843］*System of Logic* VI , William Jevons［1874］*Principles of Sciene*, Weber［1922］*Wissenschaftlehre,* Durkheim［1895］*Regle*.

も uinfied front を提示した。この点で両者は理論構築のコロンビアモデルに記憶される。しかしラザースフェルドに特有の関心事と彼自身の知的貢献はマートンのそれとは異なっていた。

ラザースフェルドの経歴の一つの特徴は我々がたった今触れたばかりの問題に特に関わっている。交絡の問題と中範囲理論は何の代替肢かという問い。ラザースフェルドは自分の方法的著作を Herbert Simon とのライバル関係の観点から理解している。サイモンの論文「因果関係の定義に関して（1952）」はそれが言及している「因果序列と同定可能性（1963）」との関連で読むと初めてわかるが，前者はラザースフェルドが Ernest Nagel とともに教えた合同授業で，1953 年に早くも教えられた。サイモンの「疑似相関：因果的解釈（1954）」はラザースフェルドを承認し，ラザースフェルドの代替肢である「エラボレーション･モデル」に言及している。ラザースフェルドとサイモンのこの重要なライバル関係は，中範囲理論の議論ならびに続くアメリカ社会学史の双方に大いに関係する。しかしそれとマートンとの関係は少なくとも活字で入手できる資料からは謎である。マートンは組織論のコンテキストを除いてサイモンに言及することはないし，サイモンの風穴をあけた論文後に成長した方法群を無視し，交絡の問題，原因の正真正銘さ，関連する問題に関してほとんど述べていない。

ラザースフェルド・プロジェクトとマートンの関係はどうだったか，両者の関係は当時の他者にはどのように映ったか。彼は何を理解したのか。彼は何に帰依したのか。理論と方法が大学院プログラムに提示された仕方の故に，院生はコロンビアのやり方を多少とも首尾一貫した全体と見なす傾向があった。ラザースフェルド陣営の人々は貢献者よりもむしろラザースフェルド・プログラムの提唱者と見る傾向があった。ハイマンは次のようにコメントしている。

> マートンは説得的ではあるものの，個別の応用調査プロジェクトもまた科学的価値を持つことができることだけを証明しながら，個別の研究から科学的副産物を引き出した。しかしながら，1948 年に社会学理論の発展における応用リサーチの価値に賛成する雄弁な一般的議論を行い，それを官庁のプロジェクトの事例，その他の博学な索引で記録した。『社会理論と社会構造』の改訂版が登場し，メッセージは英語版および他国言語版のなかで数年にわたって普及した（Hyman 1991：204）。

ラザースフェルドは理論に何ら関心を示さず，その語の通常の意味での公式化に興味も理解も示さなかった。コロンビアで訓練を受けた若き科学哲学者 Patrick Suppes は，ラザースフェルドと慎ましい関係を持ち，公理的測定理論の彼の書いた草稿をラザースフェルドに

送った。ラザースフェルドはこの草稿に応答しなかった。おそらく読まなかったものと思われる。ラザースフェルドが 1959 年の世界社会学会議で彼が理論と呼ぶ数理モデルを提示したとき，それは用語の通常受け入れられている意味での理論ではないと，スッペスから叱責を受けた（ISA 1961：350-51）。しかしこの関心の欠如は，ネーゲルと一緒に数年間持った授業と彼がスポンサーになった，方法論という大きな問題を検討する，教員のための討論集団によって裏切られた。彼と彼の協力者がプロデュースしたテキスト『社会調査の言語（1955）』はこれを反映した。言語というタームは社会調査の領域のタームを定義するという論理実証主義に近い野心を意味した。

マートンは上記の試みの主要な参加者ではなかった。しかしそれらに欠席したわけでもなかった。彼はネーゲルとラザースフェルドの合同授業に担当が記載された参加者の一人であり，ある思い出されるケースで，ネーゲルがちんぷんかんぷんと批判したパーソンズから文章を引用したネーゲルに刃向かった。マートンはパーソンズをエレガントに擁護と解明を与えることによって応じた[16]。ラザースフェルドはこんなことをしなかっただろう，いやしようと思えば出来たかも知れない。ここではまだ謎である。彼の口述史のなかで，ラザースフェルドは，マートンは中範囲理論を超えた何かがあると信じていなかったので，中範囲理論はミスリーデングなタームであると注釈している。ラザースフェルドは確かに中範囲理論を超えた何かがあると信じていなかった。マートンも同じ見解を持っていた，それともパーソンズに対する彼の丁重な譲歩は本物だったのか。もっと大事なのは，マートン自身がラザースフェルドが関わった問題に関してどう理解し，どう思っていたのか。彼らのパートナーシップの分業は理論と方法の問題に関する彼らが見解を共有していたことを反映するのか，それとも関心がほとんど重複せずにお互いが有用だった事柄なのか。彼らのいずれかがコロンビア大学に就任する前の，彼らの初期の接触はサーベイ測定の客観性に対する関心の共有であった。しかし彼らの後半の交流パタンは彼らが見解を交わし共通の見解を練り上げるという関心事というより，彼らのアイデンティティと焦点は別であるが故に，対立しないで仲良くするという different concerns であった。

しかしながら，ラザースフェルドは重要な点で中範囲理論のアイデアとその最終的運命に関わっていた。中範囲理論家たちが作業をするための材料のモデルは，ラザースフェルドによってなされた研究の類のものであった。状況の重要な側面を表現するものと考えられた概念にマッチする尺度や分類を開発した単一のサーベイ・プロジェクトの類，それは通常 2×2 表で表現され，コロンビア大学ではエラボレーションと呼ばれたモデルの観点から理由付

[16] この出来事は，その授業の学生であったコロンビア大学の科学哲学専攻の Howard Smoker が私に書いて寄こしたものである。

けがなされた。エラボレーションは，現出した関連が消滅するか逆転するかどうかを見るために，ある一変数関連に交絡因子による分類を付加することである。その推論はのちにシンプソン逆説として知られるようになったものに基づいている。統計学の事柄としては新奇性はない。コアの推論は20世紀前半の標準的統計学テキストからとったもので，著者の名，Yule/Kendallによってよく知られるものである。そこでは分割（partialling）と呼称された（Yule/Kendall 1937）。このタイプの推論の因果状況への複雑な適用は1920年代に社会学に起こったが，推論自体は社会学においても目新しいものではなかった。エラボレーションモデルのポイントは，交絡因子が疑われるコントロール変数が導入されたとき，当初の0次相関が保持されるか消滅するかを確定することにあった。コントロール変数は他の変数の因果的先行物であると見なされるなら，それは関連を説明する。観察された関連が，今や疑似的と見なされる関連の結果である。コントロール変数が当初の2変数の媒介変数と想定されるとき，インタープリテーション（媒介）という用語が用いられる。

キイタームは「想定する」である。この種の分析の聖盃は，実際の因果構造がどうなっているかを確定するために，何が何を引き起こすかについての我々の先有する観念よりも，統計学を手に入れることである[17]。ラザースフェルドのモデルは実験であり，彼はサーベイは実験に等しい，つまり関係する変数が含まれ，すべての可能な因果関係が理解される，と想定しなければならなかった。しかしコントロールされないサーベイ状況をコントロールされた実験と似ているとする想定は致命的弱点である。ハイマンは認めている。

> 読者は「発展の連鎖や形象を疑似の事例から区別する系統的な基準が何ら存在しない」この議論で数度にわたって指摘したジレンマの故に，幾分心落ちつかなさを感じるだろう。我々はこのときまで公式の基準を設定できずに来た。著者とゼッターバーグは究極的に結実すれば文献で報じられることになる一つのアプローチに目下取り組んできている（1955：263n25）。

---

[17] ここでの因果アイデアの基底にあるコアは，デュルケムによってすら認識されていた長い歴史を持つ純効果のアイデアである（Turner 1997：29）。私は社会学における因果モデルの起源についてのAndrew Abbotの興味深い考察（1998）に同意しない。なぜなら彼は，力等についての社会学の方法論者の様々な言い回しは批判の価値がある初期の形而上学の様相を呈しているから。Judea Pearlが*Causality*（2000：139n）のなかで指摘しているように，「影響を受けない」因果関係は統計学のテキストで位置を見いだした唯一のcausal notionである。私がここで述べてきたように，サイモンを動機づけたコアアイデアは，因果性，あるいは非疑似性を確定するのは統計学だけであるという考えである。これが可能かどうか，あるいは何らかの最小限の因果情報が付加されるかどうか，はサイモンのブレーク・スルー論文以来これまで文献を動機づけてきた。パールは交絡confoundingのための統計テストを生み出そうとする多くの試みでテクニカルな問題を描写した。この問題への純粋に統計的な解決は成功に近づいたものの結局は失敗に終わった（2000：182-89）。皮肉なことに，パールの解決はギディングスによって与えられた解決策に逆戻りしている（Turner 2007：17）。

その結果は日の目を見なかった。問題はラザースフェルドの鞍の下の厄介者のままで残っている[18]。

ラザースフェルドはサイモンがこの問題を解決する大きなブレークスルーを行っていることを非常によく知っていた。因果的順序 causal ordering の主題に関するサイモンの論文は，彼がネーゲルとともに教授した講義のリーデングリストに含まれ，2 週にわたる宿題の主題であった。ネーゲルもラザースフェルドもその作品を別々の日に提示した。サイモンが行ったのは，変数間の関係を想定することでなく，関係の順序をいかに導出するかに考察を与えることであった。もちろんこれらの導出は仮定を必要とした。しかし仮定はさほど煩わしくなく，仮定される必要のさほどないものであった。サイモンの戦略は最小限の因果的知識，何かが他の何かの原因たり得ないという知識（例えばそれが時間的に先行しているが故に）に依拠していた。これは基本的にラザースフェルドのものとは異なっていた。それはあたかもそれが社会学で用いられた非公式な意味での「理論」に依拠していない。それが必要とした仮定は，誰も異議を申し立てない陳腐な背景知識に限定された。方法は仮説を検証するために考えられた発明された尺度が使用されたものの，他の目的のために集められた普通のデータで確定的な結果を生み出すためにも用いられることができた。

ラザースフェルドはサイモンを脅威と見た。ハイマンの『サーベイ設計と分析（1955）』の刊行に続くエピソードのなかで明らかにされたように，ラザースフェルドはサイモンを恐れていた。ハイマンはスタウファーの『アメリカの兵士（1949）』から引いた事例の観点からエラボレーション法を提示した。この本が登場したとき，BASR の見解の言明としてプロジェクトに一体化していたラザースフェルドは，一般性の高い事実をアプリオリなものとして扱うことによって，時間順序に並べられない原因を順序づける手続きの奇妙さについてハイマンによってなされたコメントに動転した。これはラザースフェルドのアイデアであった。それはエラボレーションの実践の恣意性を減じる一つの方法であった。ハイマンがこのアイデアを奇妙と提示したことをラザースフェルドは驚天動地と考え，なぜかを説明し，未発表の訂正稿は，そのような議論をたどる意思がありたどることのできる 2, 30 人に貸し出しされるべきとのべる長いメモを書いた。ラザースフェルドが気づかないことを欲した人物はサイモンであった。「私はその本が登場してから，ハーバート・サイモンのような人物が座って仕事を始めるといらいらした。これは実に当惑することだった[19]」。ラザースフェルドの

[18] 1963 年になってラザースフェルドは，ハイマンの疑似性に関する 2 つの章の問題点，対立点，不十分さに関する term paper を assign している。Terry N. Clark, A Terminological and Conceptual Analysis of the Central Elements of Ch. VI, VII in *Survey Design and Analysis,* Lazarsfeld Papers, Columbia University.

[19] Lazarsfeld から Hyman と Zetterberg 宛のメモ書き。1956, 5, 14（コロンビア大学所蔵，希少本と草稿，ボックス 20, Nagel Collected Papers（1930–1988）

サイモンへの強迫観念は数年間続いた。ラザースフェルドはTerry Clarkに，ラザースフェルドのアプローチの方が優れたことをしていると主張することの出来るものを同定するねらいの下に，社会学に登場し始めていたサイモンに由来する構造方程式とエラボレーションモデルを比較する論文執筆を依頼した[20]。サイモンは，疑似性は因果的順序の問題の一部であるみなされ，かくして仮定によってではなく，データで決着がつけられうる問題に作り替えられることを示すことによってこの議論に勝利した（Simon 1954）。しかし，すくなくとも若干のケースでは仮定されねばならないよりもむしろ，因果的順序が引き出されることができるという事実は劇的変化であった。サイモンが仮定を立てることを要求し続けた事実は，ラザースフェルドに因果分析のこの特徴を強調するようにし向けた。

ハイマンの本でこの問題を理解しようとした人物2, 30人に対するラザースフェルドの言及が明言しているように，当時は方法論をめぐるこの闘争のより大きな意義は小さな集団を超えて明確にならなかった。マートンはおそらく知っているものの数に含まれないだろう。しかし余塵が治まった1975年に，マートンの弟子，コーザーはASA会長演説で，エスノメソドロジーとウィスコンシンモデル（それは地位達成にサイモン方法の展開形を適用したものだった）を攻撃した。地位達成の問題点は農村の人口流出問題に対する19世紀末の世界的関心事に起源を持つ。19世紀の都市への大挙の移動の結果として，農村に残った人口の質の問題。この問題の研究は，どんな特性が残った人物から去った人物を区別する問題の研究に，どんな特性が人々を上昇移動させたかの問題に変容した。コーザーは正しくも用いられている方法は，コロンビアモデルにとって大きな脅威であることを理解した。彼らは同じ仕方で理論に依拠していない。仮定を正当化するには基礎的背景知識で十分である。彼らは中範囲理論に集積されうるベレルソン・スタイナータイプの知見目録を生成するために実験アナロジーを用いないし，測定する新しい概念を発明もしなかった。

機能主義の問題

マートンは上記の方法論上の問題自体には関与しなかった。しかし彼は1960年代によって提起された最もドラマチックな問題，機能主義の消滅を取り上げることを余儀なくされた。これは個人的な要素を持った。ミルズの『社会学的想像力（1959）』とパーソンズの語句注

---

[20] Terry N. Clark Method File Part 1；シリーズIII　追加ファイル，コロンビア大学所蔵，希少本と草稿，ボックス1960-74.　Simon Method, Lazarsfeld Papers.
ラザースフェルドもまた自分の遺産がここで危機に瀕していることに気づいた。クラークがこの問題の他の究極的には勝者の側の歴史的背景を考察する博士論文の1章を提出したとき，ラザースフェルドは「お前は私の歴史を書いているのだ，Phil Hauserのではない」と注釈してそれが取り除かれることを要求した（Clark 1998：304）。ハウザーはギディングスとピアソンに，計量経済学サイドを通じてサイモンのブレークスルーに通じるオグバーンの相関の系譜の申し子である。

解礼賛主義（panglossianism）と無味乾燥への反動によってインスパイヤされた1960年代の学生たちは機能主義と実証主義を悪魔扱いした[21]。マートン自身，彼の弟子Alvin Gouldnerの変節を含む潮の変化に十分気づいていた。彼は1975年に刊行された論文「社会学の構造分析」でそれに応答した。そこでは彼は，通常糾弾される機能主義から自らを区別するように，自分自身のコミットメントを回顧的に再解釈している。この論考は見解は特有の遠回しであるものの，科学哲学とそれの社会学との関係についての彼の明確な議論を含んでいる。

この論考を理解するには，それが再解釈している先行する二つの論文を理解することが肝要である。第一のものは，「意図的社会行為の予期せざる結果（1936）」で，これはウェーバーに傑出したアイデアだが，多くの追随者，信奉者を見いだしたアイデアを取り上げた知性史の傑作である。第二のものは，「顕在的機能と潜在的機能（1949）」で，ポリテカルマシンの機能性の彼の有名な分析を始めて紹介したものである[22]。論理実証主義者はこの時期社会学の機能的説明に興味を示し，彼らの分析を社会学，特にマートンに適用する一連のこの主題の論考を生産した。その成果は現れている。

コロンビアの社会学に最も密着した科学哲学者は，Ernest Nagelであった。彼の世代の科学哲学者のなかでは最も知られた人物である。我々はすでに見てきたように，多年にわたって彼はラザースフェルドと授業を共同で担当してきた。マートンは『社会理論と社会構造』の後期の版（1968）で，機能分析に関するネーゲルの論文（1956）を引き合いに出し，「ネーゲルはマートンのパラダイムを，その様々な部分が生物学の機能的アプローチの諸要素といかに関係するかを明示することが意図された抽象的な名辞の集合の観点から公式化した（Merton 1949：138）」と説明している。しかし注意深く読むと，ネーゲルの論文はマートンの考えを肯定しているものではない。そのかわり，それはマートンの考えが実行に移せないことを明らかにしている。ネーゲルの見解は，機能主義者がルーチンに行っている主張を行う資格を得るには，法則の形をした沢山の理論を必要とする，というものであった。完璧な説明は，理論的考察を要求し，所与のシステムにとっての機能的という発想を充足していると見なされる均衡状態の集合を記述する法則を確定する。このいずれもマートンのなかに見いだされないし，そのような理論がどのようなものに行き着くか，人はそれらをどうやって手に入れるかに関する議論は一切ない。またネーゲルは潜在的―顕在的の区分に印象づけら

[21]〔訳注〕ターナーは，リジョインダーのなかで，ミルズの『社会学的想像力（1959）』ではマートンを名指しせず，理論学派と調査学派の間を忙しく立ち回ったステーツマンと述べていること（Mills 1959：110-111）に触れている。

[22] ポリテカルマシンの事例のインスピレーションは，ラザースフェルドを魅了した一冊の本，政治的ボスの自叙伝で弁明書，「あなたはボス（Flynn 1947）」という題から得たように思われる。コロンビア大学蔵，希少本と草稿，Public Opinion Series 4, Box 1, Bryce, James, Lazarsfeld Papers.

れていない。彼は，主観的ねらいが彼にとって何ら特別の説明上の地位を持たないなら，潜在的-顕在的機能のマートンの区別は無意味であり，機能のすべてが潜在的機能の題目に属する，と指摘する（Nagel 1956：271）。機能主義的説明を完了するには，均衡状態の規定因子のようなものを特定する a full theory を必要とするという彼の議論と符合するように，マートンはそのような探求の完結した帰結よりもむしろ，予備段階の機能分析に主として興味を持っていることをネーゲルは観察している（Nagel 1956：263）。

上記の批判のポイントは「目的論的説明には halfway house（途中の休み屋）は一切存在せず，他の目的の観点から説明される目的の機構全体にコミットされることなしには，それらの利用法は一切存在しない」という点である。これは Nagel-Lazarsfeld の授業クラスで読まれた論文の一つでなされた指摘である。ヘンペルの類型に関する論文（1952）は，合理的行為の経済学理論の目的論的抽象ですら，説明的である行為の一般理論に根ざすことができないなら，説明的でない」と指摘している。マートンの場合，争点は完結であった。例えば，市政におけるボス・システムを機能的と語るには，ボス・システムは何にとって機能的であるか，どんなフィードバックメカニズムがボス・システムの機能性を保証するかに関する問い，これらのメカニズムが可能な機能的解決の最適ないし最大均衡のために上記のメカニズムがどのように選択されるかに関する問いにコミットする。Elster がのちに繰り返すように，これらはまさにマートンが答えていない問いである。それらはネーゲルがマートンの関心が主として説明の予備段階にあると彼が見誤った理由である。マートンが分析を完結するまで進めていたなら，ボス・システムが埋め込まれているより大きなシステムの理論を構築する必要があっただろう。これは満開の機能教義ないしシステム教義に導く途 the path である。要するに，中範囲理論が説明の終点と見なされる場合，機能主義と中範囲理論は論理的に両立しがたいプロジェクトである。

1975 年の論文は 1960 年代の猛攻撃によって提起された上記の問題やその他の問題へのマートンの間接的な応答である。その中で，マートンは自分自身の見解を 60 年代の暴動とポスト実証主義科学哲学の勃興に照らして再解釈し，自らの立場を構造機能主義と区別するために，構造分析と呼ばれるパラダイムもどきのパースペクティブとフレーム化し直している。独自のアプローチとしてのこのパースペクテイブの擁護はその論文が集録された本のテーマであり，最近になってのマートン擁護（cf. Clark/Modgil/Modgil 1990）のテーマであった。方法史の観点からは，これは注目に値する降伏である。中範囲理論の約束は，アプローチが多過ぎ，到達した成果がほとんどないという問題から我々を解放することであった。BASR タイプのサーベイ結果に基づく経験的な一般化に集中し，それらからのアブダクションとそれらについての我々の理論的理解を他のコンテキストへの転移（transfer），それから

これらの結果を理論的に系統化し，ある理論を他の理論と統合することによって，我々は多様な準拠枠を構築しようという社会学者の野心に由来する様々なアプローチの専横から解放された結論を手に入れることができるだろう。我々は今や，構造分析自体はアプローチのなかの一つであること，このアプローチの開発はマートンの主張する機能主義との決定的な違い，独自性のコアであること，彼が 1948 年末に自信たっぷりに宣言した理論的多元主義は，主観主義と無政府主義に堕しないなら良きことであると教えられる。

この譲歩を行うことは，社会学のあらゆる主要な実質的領域で吹き出してきたことが現実に傅くことに他ならなかった。各々の領域は首尾一貫した中範囲結果によって特徴づけられるのではなく，複数の競合するアプローチによって特徴づけられた。例えば，マートン自身が中範囲理論の有望さと包括理論の無意味さの a poster child として扱った逸脱は，アノミーに関する彼自身の影響力のあるアイデアのほかに，ラベリング理論，分化接触理論，権力理論等の十分に確立された見方を持っている。従って一つのアプローチを持つというアイデアに後退することは中範囲理論のコア・モチベーションに降参することであった。だがその議論は主要な曖昧さを抱えている。理論の多元主義はある範囲ではいいことであることを知っているが，構造分析のアイデアを他のパラダイムの補完的なアイデアと結びつけることは，「究極的だがまだ遠い理想である統一された包括理論に向かう謙虚な理論的地固めを行い続ける（1975：52）」ことを助けるであろうことを知っている。その到来は依然として究極目標に見えるが，それはもっと先のゴールである。

しかしマートンアプローチの上に書き下ろされたバージョンは，説明の見地から見ると独自の問題を孕んでいることが判明している。マートンは機能主義を特徴づけるコンセプトに対する多くのアッピール――逆機能概念の使用，アンビバレンスの発想，マタイ効果の議論――を，構造的アプローチに彼がコミットしている証拠として上げることができる。そして彼は自分の言語とマルクス主義のそれ，矛盾の発想との類似を証明することができた。しかしマルクス主義は，矛盾の将来の革命として見なされるもののアイデアを有するが故に，明らかに，矛盾の発想に権利を与える歴史的目的論の一形態である。マートンに彼の用法の権利を与えたものは何か。そしてその用法とは何か。彼は「生成する」という用語を，社会構造がいかにして異なった逸脱率を生み出すか，社会構造が自らのなかに変化をいかに生成するかを特徴づけるために用いている（1975：35）。社会構造が変化を生み出す一つのやり方は，逆機能を増幅する緊張，対立，矛盾を通じてである（1975：36）。対立自体は，社会構造が（自分自身の利害と価値を持つ，従って潜在的に対立するそれや共有するそれを持つ）地位，階層，組織等に分化する事実の結果として構造によって生成される（1975：35）。

ここには識別可能な説明パタンが存在する。社会構造がそれが生み出す主要結果と部分的

に対立する副産物を産む何かをする。しかしそのパタンは機能主義的である。doing は機能的発想としてのみ理解でき，我々が機能的発想から出発するときに限って，逆機能的結果は了解できる。しかし，ネーゲル，ヘンペルが1950年代の Nagel–Lazarsfeld 授業のリーデングスで指摘したような（そしてエルスターがのちに指摘したような），機能の発想を用いることは，物語の残り（目的の全開の考察と目的に方向性のある関係を生み出すメカニズム）にユーザーをコミットさせることである。構造的アプローチはそれが手放した機能主義に寄生していた。

後悔するものは何もないか？

マートンは機能主義の内部破裂，論理実証主義の終焉，中範囲の理論のコンセプトが依拠する統計分析モデルの代替え，彼が戦後期にプロモートした行動科学モデルの失敗をくぐり抜けてきた。彼の反応はどうであったか。彼の同時代人はどう反応したか。一人の親密な同時代人は Edward Shils であった。彼の経歴はビックリするほどマートンと多くのパラレルを持っている。ともに，教育と専門職への抱負が規範であるフィラデルフィアのユダヤ出身であること，ともにマンハイム，パーソンズと形成期の学問的，ある程度は個人的な交流を持ったこと，ともに古典的社会理論を強迫的に読んだこと，ともに科学を学んだこと，ともに戦後期の行動科学の盛んなときの熱心な参加者であったこと。

シルズは同時期にパラレルであるがマートンに比べてはるかに知名度が低いエセー（1949）を書いている。しかしながら，彼は自分のかつての執心を放棄した。彼は1980年に次のように語っている。

> 私がこの時期の当初に私の書いたものを読み返すとき，私は今では青二才として登場するものと信じる意思によって穴があったら入りたい心境である。第二次世界大戦終結後少なくとも5年間は，社会科学の方法と理論を通じて獲得された知識は，民衆の知恵，西洋社会の統治に貢献するほど十分に発達したと思っていた（［1980］1997：21）。

マートンは決してそのような言明を公けにしなかった。1975年の「社会学の構造分析」でなされた譲歩は真摯であったが，決して恥ずかしがってはいない。

その代わり，マートンは統一された理論の夢の実現を遠い将来に追いやる工夫によって，オリジナルバージョンから救済できるものを救済しようと努めた。このときまで，マートンはネーゲルの批判に応答することなく，その内容を認めることなく20年間過ごしてきていた。彼は説明力を提供する機能主義の語彙と彼の考えるものに乗っかることなく，もっと素

朴な形の機能主義と自分との違いを強調した。彼はラザースフェルドを隅に追いやった統計分析の革新に気がつかなかった。もし彼が方法論的著作を社会学の発展にとって戦略上の暗黙の賭けを促進するものと解していたなら，彼は賭けが暗転することに気づいただろう。しかし彼はそれを放棄しなかったし，そのかわりにそれはいつかペイ・アウトするだろうという希望的観測まで漏らしている。

方法論思想家としてのマートンの評価は，賭けが依然として大丈夫なのか，それともいままでは大丈夫だったがもはやそうでないのいずれなのかの質問にダウンする。しかし常にそうであるように，曖昧さが存在する。マートンは1950年代半ばまで，Lazarsfeld-Nagelクラスで議論されたネーゲル，サイモンの論文から，「彼が『社会理論と社会構造』で自分のとった立場が支持しがたいものであること，ラザースフェルドモデルの因果性の扱いは取って代わられたこと，（逆機能，ストレインを含む）機能概念を用いた中範囲の理論は遅かれ，早かれ返済されるという仮定の下に，借金をテークアウトする試みに過ぎないこと（Fodor 2007：4）」に気づいていたはずである。換言すれば，彼はごく初期の段階からこれがa bad bet（悪い賭け）であることを知っていたはずである。どんな理由で，マートンは問題点の何れも彼は認めなかったのか。マートンは，上記のすべてにも拘わらず，コロンビアモデルの所産が納得でき，価値があると単に信じていただけなのか。しかしながら，一つのことは明白である。この何れも60年代，反乱学生とは関係がないこと。マートンの立場に反する事例を提供した人物は1920年代30年代に遡る経歴を持つ既存のアカデミーの成員であった。どんな理由でマートンは応答に失敗したのか。それは謎である。おそらく，その答えは，自己の立場の正しさは究極的に証明されるという彼の信念であろう。しかし，彼が実際に信じていたなら，なぜ信じたのかは依然謎である。

文献一覧

Berelson, Bernard/ Gary Steiner 1964　*Human Behavior : An Inventory of Scientific Findings.* New York : Harcourt Brace. 南博・社会行動研究所訳『行動科学事典』1966 誠信書房

Berger, Joseph/M.Zelditch, Jr/B. Anderson 1966　*Sociological Theories in Progress. Boston : Houghton-Mifflin.*

Clark, John/ Celia Modgil/ Sohan Modgil（eds.）*Robert K. Merton : Consensus and Controversy.* London : Falmer Press.

Coleman, James 1990　"Robert K.Merton as teacher."　In : John Clark/ Celia Modgil/ Sohan Modgil（eds.）*Robert K. Merton : Consensus and Controversy.* pp. 25-32.　London : Falmer Press.

Conant, James B. 1947　*On Understanding Science : A Historical Approach.*　New Haven, CT : Yale University Press.

――― 1951　*Science and Common Sense.*　New Haven, CT : Yale University Press.

――― 1952　*Modern Science and Modern Man.*　New York : Columbia Univ. Press.

――― ed. 1957　*Harvard Case Histories in Experimental Science.*　Cambridge, MA : Harvard Univ. Press

Coser, Lewis 1956　*The Functions of Social Conflict.* Glencoe, IL : Free Press. 新睦人訳『社会的闘争の機能』1978 新曜社

――― 1975　"Presidential address : Two method in search of a substance."　*American Sociological Review* 40（6）: 691-700.

Costner, Herbert/ Robert K. Leik 1964　"Deductions from axiomatic theory."　*American Sociological Review* 29（6）: 819-35.

Elster, Jon 1990　"Merton's functionalism and the unintended consequences of action."　In : Jon Clark/ Celia Modgil/ Sohan Modgil（eds.）*Robert K. Merton : Consensus and Controversy.* pp. 129-35. London : Falmer.

Fodor, Jerry 2007　"Why pigs don't have wings."　*London Review of Books.* 29 October, 4.

Glaser, Banny/ Anserm Strauss 1967　*The Discovery of Grounded Theory : Strategies for Quantitative Research.*　Chicago : Aldine Publishing. 後藤隆，大出春江，水野節夫訳『データ対話型理論の発見』1996 新曜社

Hyman, Herbert 1955　*Survey Design and Analysis : Prnciples, Cases, and Procedures.* Glencoe, IL : Free Press.

――― 1991　*Taking Society's Measure.*　New York : Russell Sage.

Kuhn, Thomas 1962　*The Structure of Scientific Revolution.*　Chicago : Chicago Press.　中山茂訳『科学革命の構造』1971 みすず書房

Lazarsfeld, Paul/ Morris Rosenberg（eds.）1955　*Language of Social Research : A Reader in the Methodology of Socual Research.* Glencoe, IL : Free Press.

Merton, Robert 1936　"The unanticipated consequences of purposive social action."　*American Sociological Review* 1 : 894-904.

――― 1945　"Sociological theory."　*American Journal of Sociology* 50 : 462-73.

――― 1948　"The bearing of empirical research on the developement of social theory."　*American Sociological Review* 13（5）: 505-15.

――― 1949　*Social Theory and Social Structure.*　New York : Free Press.

――― 1957　*Social Theory and Social Structure.*　Revised, ed. New York : Free Press.『社会理論と社会構造』1961 みすず書房

―――［1948］1968a　"The bearing of empirical research on sociological theory."　In : *Social Theory and Social Structure.* enlarged ed. pp. 156-71.　New York : Free Press.「経験的調査の社会学理論に対する意義」（中嶋竜太郎訳）1961 所収

―――［1949］1968b　"The bearing of sociological theory on empirical research."　In : *Social Theory and Social Structure.* enlarged ed. pp. 139-55.　New York : Free Press.「社会学理論の経験的調査に対する意義」（森好夫訳）1961 所収

―――［1949］1968c　"Manifest and latent function."　In : *Social Theory and Social Structure.* enlarged ed. pp. 73-138.　New York : Free Press.「顕在的機能と潜在的機能」（金沢実訳）1961 所収

――― 1968d　"On sociological theories of the middle range."　In : *Social Theory and Social Structure.* enlarged ed. pp. 39-72. New York : Free Press.「中範囲の社会学理論」（森好夫訳）『社会理論と機能分析』1969 青木書店

――― 1968e　"Karl Manheim and the Sociology of Knowledge."　In : *Social Theory and Social Structure.* enlarged ed.　New York : Free Press.「カール・マンハイムと知識社会学」（森好夫訳）1961 所収

――― 1973　"The Matthew effect in science."　In *The Sociology of Science : Theoretical and Empirical Investigations.* pp. 439-59.　Chicago : Univ. of Chicago Press.

――― 1975 “Structural analysis in sociology.” In Peter Blau（ed.）*Approaches to the Study of Social Structure.* pp. 21-52. New York : Free Press.「社会学における構造分析」（寺田篤弘訳）斎藤正二監訳『社会構造へのアプローチ』1982 八千代出版

――― 1982 *Teoria sociologiczna i struktura spolezuna.* Polish ed. Warsaw : Wydawnictwo Naukowe PWN.

Merton, Robert K./ James S. Coleman/ Peter H. Rossi（eds.）1979 *Qualitative and Quantative Research : Papers in honor of Paul F. Lazarsfeld.* New York : Free Press.

Mills, C. Wright 1959 *The Sociological Imagination.* Oxford, UK : Oxford Univ/Press. 鈴木広訳『社会学的想像力』1965 紀伊國屋書店

Nagel, Ernest 1956 “A formalization of functionalism.” In *Logic without Physics : And other essays in the philosophy of science.* pp. 247-83. Glencoe, IL : Free Press.

Parsons, Talcott 1948 “The position of sociological theory.” *American Sociological Review*13（2）: 156-71.

――― ［1937］1949 *The Structure of Social Action.* 2nd ed. New York : Free Press. 稲上毅，厚東洋輔，溝部明男訳『社会的行為の構造（1～5）』1977～89. 木鐸社

Pawson, Ray 2000 “Middle range realism.” *Archieves europeennes de sociologie.* 41（2）: 283-325.

Price, James L. 2003 “Strategies of theory construction at Columbia during the 1950s.” http://www.uiowa.edu/～soc/docs/tw/pricetw2003

Shils, Edward 1949 “Social science and social policy.” *Philosophy of Science* 16（3）: 219-42.

Simon, Herbert 1952 “On the definition of the causal relation.” *Journal of Philosophy* 49（16）: 517-28.

――― 1953 “Causal ordering and identifiability.” In William C. Hood/ Tjalling C. Koopman（eds.）*Studies in Econometric Method.* Cowles Commission Monograph 14. New York : John Wiley.

――― 1954 “Spurious correlation : A causal interpretation.” *Journal of the American Statistical Association* 49 : 467-79.

――― 1979 “The meaning of causal ordering.” In Merton, Robert K./ James S. Coleman/ Peter H. Rossi（eds.）1979 *Qualitative and Quantative Research : Papers in honor of Paul F. Lazarsfeld.* pp. 65-81. New York : Free Press.

Stoufer, Samuel A. et al. 1949 *The American Soldier.* Princeton, NJ : Princeton Univ. Press.

Zetterberg, Hans ［1954］1963 *On Theory and Verification in Sociology.* Stockholm : Amquist & Wicksell, Totowa, NJ : The Bedminster Press. 安積仰也・金丸由雄訳『社会学的思考法』1973 ミネルヴァ書房

あとがき関係

Aggassi, Joseph 2009 “Turner on Merton.” *Philosophy of the Social Sciences.* 39（3）: 284-93.

Crothers, Charles 2009 “Merton’s flawed and incomplete methodological program : Response to Stephen Turner.” *Philosophy of the Social Sciences.* 39（3）: 272-83.

Kincaid, Harold 2009 “A more sophisticated Merton.” *Philosophy of the Social Sciences.* 39（3）266-71.

Sztompka, Piotr 2009 “The assault badly misses the mark” *Philosophy of the Social Sciences.* 39（3）: 260-65.

Turner, Stephen 2009 “Shrinking Merton.” *Philosophy of the Social Sciences.* 39（3）: 481-489.

――― 2005 “High on insubordination.” In : Alan Sica/ Stephen Turner（eds.）*The Disobedient Genaration. Social Theorist in the Sixties.* pp. 285-308. Chicago : The Univ. of Chicago Press.

Turner, Stephen P./ Jonathan H. Turner 1990 *The Impossible Science : An Institutional Analysis*

of American Sociology. Newbury Park : Cal : SAGE Pub.
Turner, Stephen 1994 "The origins of mainstream sociology and other issues in the history of American sociology." *Social Epistemology*. 8(1) : 41-67.
Price, James L. 2003 "Strategies of theory construction at Columbia during the 1950s." http://www.uiowa.edu/～soc/docs/tw/pricetw2003

訳者あとがき

訳出した論文は Philosophy of the Social Sciences 39 巻 2 号（2009）174-211 所収，Stephen Turner 著 Many Approaches, but Few Arrivals. Merton and the Columbia Model of Theory Construction. である。

ステフェン・ターナーの名は，1990 年刊行のジョナサン・ターナーとの共著『不可能な科学：アメリカ社会学の制度的分析』セイジ出版で，アメリカ社会学を戦前のシカゴ学派，戦後のハーバード学派（パーソンズ学派）を中心にとなえるオーソドキシーに異を唱え，ギデングズ→オグバーン→ダンカン→クロッグ（統計学，相関分析，パス解析の系譜）ギデングズ→チェイピン→セウェル→ウィスコンシン・地位達成派（測定の系譜），チェイピン→スタウファー，ラザースフェルド（応用心理学・カテゴリー分析の系譜）をアメリカ社会学の主流と見なす新しいアメリカ社会学史家として印象に残っていた。パーソンズ，マートンの機能主義に対しては批判者の目で見る学者である。

訳出した論文でも，マートンが提唱した中範囲の理論が曖昧だ，ネーゲルによる機能分析への論理的批判に答えていない不誠実，1975 年の論文で機能主義から転向しているのに素直に認めず弁明し，名称を機能主義（構造・機能分析）から構造分析にこっそり入れ替えていることを指摘している。ステフェンのこの論文の持ち味は，マートンだけでなく，ゼッターバーグ，ラザースフェルド，ネーゲル，サイモンの 50 年代コロンビア大学の社会学部，それに協力した非社会学者（哲学者，経営学者）の研究者集団（コロンビア理論構築モデル）をも考察の対象に入れていることである。ラザースフェルドをサイモンに劣等感を抱いていたと見て，両者を比較している。

訳者がステフェンのこの論文に惹きつけられたもう一つの理由は，スウェーデン人のゼッターバーグをコロンビア理論構築モデルの重要人物として位置づけていることにある。ゼッターバーグの『理論と検証』は 50 年代のアメリカで社会学の理論構築法のバイブルとして読まれたものである。中範囲の理論と命題理論，公理演繹法とどんな関係にあるか，ゼッターバーグの命題理論，公理演繹法はホーマンズの『人間集団』『社会行動』に影響をあたえ，ステフェンのこの論文でも触れられているポーランドの社会学者マレウスキー『行動と相互行為』はホーマンズの社会行動論とフェスチンガーの認知不協和理論を高く評価し，それの

問題点を指摘して前進を図ったものである。ゼッターバーグの命題理論，公理演繹法の方針に忠実に，人間行動，社会集団の研究知見の目録棚卸しを行ったベレルソン／スタイナーの成果は，フンメル／オプが心理学命題への還元の被還元命題である社会学命題として使っている。

ステフェンがコロンビアの理論構築モデルに着目するのに力を貸したのはプライスの「1950 年代コロンビア（大学社会学部）理論構築戦略」（2003 ウェブ公開論文で雑誌，著書には未掲載）である。ピーター・ブラウ，ジェームズ・コールマン，ルイス・コーザー，アルビン・グールドナー，ジェラルド・ヘイグ，エリウ・カッツ，セイモア・リプセット，ピーター・ロッシら 1950 年代コロンビア大学社会学部に学んだマートン・ラザースフェルドの弟子達の緩やかな共通点（確固たる共通のパラダイムとまではいかない）を 10 項目（公式化，一般理論志向，中位の抽象水準，理論と方法の双方の重視，機能分析，例外ケースを取り込む分析志向（ミヘルスの寡頭制の鉄則の例外としてアメリカの印刷組合の分析），戦略的な場所の選択（社会化を研究するのに厄介な家族でなく医学部の修習生を選ぶ），類型作成の際の属性空間の利用，継続（アメリカ兵士，権威主義的性格の分析の継続），エピデモロジー（経験的一般化による理論の開発の促進＝帰納法による抽象水準の一段上昇）を抽出している。ステフェンのコロンビア理論構築サークルが，マートン，ラザースフェルドの同輩との学問的交流を指すとすれば，プライスのそれは，マートン，ラザースフェルドの直弟子の研究手法の緩やかな共通点のあぶり出しである。ベレルソン／スタイナーが行った目録棚卸しの手法の一層前進した形での整理である。

ステフェンの論文に対して，4 人の学者がコメントを寄せ，ステフェンがそれに応答している。そのなかにはマートン研究の専門家，クローザー，ストンプカも含まれている。マートンの中範囲の理論は，アプローチが多くても成果が少ない旧来の社会学の問題点を克服しようとするものであったが，それに成功していない，というステフェンの指摘を承認して，マートンの代わりにできなかった言い訳を述べて擁護している。ステフェンはそれをマートンを縮小するものだとさらに反論する。本稿の読者にはくれぐれもストンプカのように，「マートンの仕事に成果は少なかった」と誤読しないことを願っている。

Stephen Park Turner（シカゴ，1951 年生まれ）は，ミズウリー大学で，社会学と哲学の学位を得た。彼は 1975 年以来，サウス・フロリダ大学に勤務。1987 年に大学院教授に昇格して，大学での主要キャンパスが哲学部に次第に移ってからは哲学関係の仕事の比重が大きくなったが，訳出した論文は久方ぶりの社会学の仕事である。

社会統計学の用語については本学人間科学科　神林博史氏の教示を得た。パースの abduction の訳語に定訳のないことを本学言語文化学科　伊藤春樹氏から教示を得た。お二

方に記して謝意を表したい。

社会学関係の著作

1980　*Sociological Explanation as Translation.*　Rose Monograph Series of the American Sociological Association.　Cambridge, Ma : Cambridge University Press.

1986　*The Search for a Methodology of Social Science.　Durkheim, Weber and the Nineteen-Century Problem of Cause, Probability and Action.*　Dordrecht, Holland : Kluwer Academic Publishers.

1990　（with Jonathan Turner）*The Impossible Science : An Institutional Analysis of American Sociology*.　Beverly Hills : Sage.

哲学関係の著作

1994　*The Social Theory of Practices : Tradition, Tacit Knowledge, and Presuppositions.* Oxford : Polity Press.

2002　*Brains/ Practices/Relativism : Social Theory after Cognitive Science.*　Chicago : University Chicago Press.

2010　*Explaining the Normative.　A Critical Examination of Normativism.*　Oxford : Polity Press.

編著

Stephen Park Turner/ Paul A. Roth（eds.）2003　*The Blackwell Guide to the Philosophy of the Social Sciences.*　John Wiley & Sons.

Stephen Park Turner/ Mark Risjord（eds.）2007　*Handbook of the Philosophy of Science.　The Philosophy of Anthropology and Sociology.*　Amsterdam : Elsevier.

Stephen Park Turner/ William Outhwaite（eds.）2007　*The Sage Handbook of Social Science Methodology.*　Sage Publications Ltd.